



機銃掃射を受けて傷ついた六地蔵（守山市吉身六丁目）

守山空襲の弾痕が残る地蔵

「地蔵さん、痛かったやろな。怖かったやろな。新しい地蔵さんに変えたらよいのやけど、この傷跡を後世に残し、戦争のむごさを伝えたいのや。ごめんね。」

管理人

敷地内に掲げられている管理人の言葉

吉身共同墓地の六体地蔵

守山市吉身六丁目にある共同墓地は空襲があった線路の近辺にあり、その入口に立つ六地蔵はアメリカ軍戦闘機の機銃掃射を受けて、顔面や後ろの光背が欠けています。

硬い石で作られているにもかかわらずこのように傷ついていることから、機銃掃射のすさまじい威力がわかります。実際に生身の体に銃弾を受けた人たちの痛みや苦しみがどれほど大きなものだったのでしょうか。



故 岡田義子さんが六地蔵を寄進

証言 2

油池で泳いでいる時に…

吉身町の住民
岡田治子さんの証言



岡田治子さんの夫（故 岡田隆次さん）は、守山空襲発生時、友だちと吉身町にあった油池に潜り、池の底にある小石を拾って上り、形や大きさを比べる遊びをしていました。



当時の油池の様子（守山市誌より）

当時の油池は、深く小学生が底まで潜って水面上には呼吸が苦しくなり危険であった。現在なら禁止であるが、戦時中はこのような遊びも普通であった。

私（岡田治子さん）も当時小学4年生で昭和20年7月まで長浜市に居住していた。授業中に小学校近くの軍需工場に空襲があり、すぐに机の下に身を隠した。爆撃機の「ブーン」という大きな音がとても怖く、その夜は、何時でも避難できるように、服を着て草履（ぞうり）を履いたまま寝ていたことを覚えている。その頃は食糧が不足しており、とてもひもじい思いをしたことを今でも思い出す。

令和7年(2025年)12月15日取材

空襲発生時、小学4年生であった夫は、当時吉身にあった油池（あぶらいけ：湧水池であったが現在は埋め立てられている）に潜り、水面に顔を出したとき、アメリカ軍の戦闘機が頭の上に来ており、「パン、パン」と機銃を撃ってきた。びっくりして服を着ることもできずに細道をころげるように逃げて、途中の慈眼寺（じげんじ）の鐘つき堂の柱にのぼり隠れて駅の方を見ていた。何が起きているのかわからなかった。子ども心にもただごとではない雰囲気は伝わり、帰宅後も家族に話すこともなかった。その頃、隆次の母は「にちゃんはどこへ行ったかわからん。あんた（夫の妹）は家から出たらあかん！」と叱る口調で言って、息子の身を案じていた。

平和都市 守山市に向けて

私たちの守山市では、二度と戦争の惨禍があってはならない、核兵器が再び使用されてはならないとの決意のもとに、「のどかな田園都市守山」平和都市宣言が、昭和63年(1988年)12月22日に議会で決議されました。戦後50年の節目を経た平成9年(1997年)8月、平和を願う多くの市民が集い、平和への思いを高め、未来を担う子どもたちに平和の大切さを伝えていく場として、市民運動公園に「平和の広場」が設けられました。



平和都市宣言



平和都市宣言シンボルマーク

平和の祈り像



将来にわたって市民の平和への思いを高め、平和の尊さを伝えようと平成9年(1997年)に設置したものです。「平和の祈り」をテーマに、平和の乙女の像を中心にして、その上には平和の象徴である鳩が飛び、向かって左側には、笛で美しい平和の調べを奏でる少年、右側には、未来永劫に平和が続くことを祈る折鶴を持つ少女の姿があります。

平和の祈り像の碑文

平成九年八月六日
守山市
制作 山田良定

祈りの像によせて
この像から何を想い 何を感じるかはその人の心に委ねる
公園の心地よいそよ風の中に立つ平和の乙女
その周りに羽ばたき舞い遊ぶ鳩に加え
心に響く少年の笛の音を聞きながら折鶴を持つ少女
今日の平和を築く人々の追悼の心を表出した
戦後五十有余年 再び惨禍を繰り返さないことを誓い
核兵器の廃絶と平和の尊さを後世に伝え 全市民が未来永劫に
平和を願うものである



平和の祈り像

広島原子爆弾被爆石



垂直に立つ石と横たわる石、この2つの被爆石は、爆心地から約1.2km離れた地点にあった旧広島市役所の敷石です。原子爆弾による悲劇を永久に伝える証人として、広島市からいただいたものです。

昭和20年(1945年)8月6日午前8時15分、人類史上最初の原子爆弾が広島市に投下されました。

核兵器の威力は恐ろしいもので、まちは一瞬にして焦土となり、多数の市民が犠牲になりました。この被爆石には、核兵器の廃絶と世界の恒久平和実現という広島の切なる願いが込められています。



広島原子爆弾被爆石

長崎被爆二世の柿の木



被爆70年の節目となる平成27年(2015年)、守山市遺族会のご尽力により、長崎で被爆した柿から再生された「被爆二世の柿の木」を譲り受けました。

原木の柿の木は、被爆の際に半身を真っ黒に焼け焦げながらも奇跡的に生き残りました。その後、原木は被爆により元気を失いましたが、長崎市在住の樹木医、海老沼正幸さんが治療を行い、原木から二世の柿の木を生み出すまで回復させることができました。

この柿の木に核兵器の廃絶と世界の恒久平和への願いを込めて、長崎県連合遺族会、滋賀県遺族会、守山市遺族会の皆様とともに平和の広場に植樹しました。



長崎被爆二世の柿の木

戦後80年平和持続祈念碑



戦後80年の節目となる令和7年(2025年)8月に、戦没者等への追悼と恒久平和の祈念を目的として建立しました。

この碑には日清戦争以降の戦死や空襲等による死没等、戦争により命を失われた守山市出身等の方々のお名前が刻まれています。実存した一人ひとりの尊い命やかけがえのない人生が、戦争によって奪われた事実を将来にわたって伝え続けるものであり、平和を希求する強いメッセージとなるものです。



戦後80年平和持続祈念碑